

一般常識

【1】景気変動

[1] 景気変動の種類

資本主義経済には景気変動がある。景気変動とは、好況、後退、不況、回復という4局面の周期的な繰り返しのことで、**景気循環**とも呼ばれる。好況のときは、商品価格の上昇、利潤の増大、生産活動の活発化、雇用の拡大などが見られる。後退のときには、生産活動や雇用、物価が下り坂に向かう。そしてそれらがもっとも落ち込み、企業の倒産や失業者の増大が続くのが不況である。それらが再び上り坂に向かう状態を回復という。

景気循環の一周期とは、好況時の山（ピーク）から後退、不況、回復と進み、次の好況時の山に達するまでの期間である。その周期の長短により、短期波動、中期波動、長期波動に分かれるが、それぞれ発見者の名前をつけて、**キチンの波**、**ジュグラールの波**、**コンドラチェフの波**、と呼ぶこともある。

短期波動（キチンの波）の周期は3～4年で、在庫投資による在庫調整の変動が主因で起こるといわれている。中期波動（ジュグラールの波）の周期は7～10年で、設備投資の過不足の調整過程から生ずる。長期波動（コンドラチェフの波）の周期は40～50年で、技術革新や資源の大規模な開発などで起こるとされる。

[2] 戦後日本の景気変動

第二次世界大戦後、日本は、米国をはじめとする国際社会からの支援・融資を受けながら、自助努力の精神に基づき、戦禍で疲弊した国土の再建に努力した。政府はさまざまな復興事業によって生産の回復をめざした。米国からの基金は通貨安定、国鉄、電気通信、電力、海運、石炭などのインフラをはじめとする経済復興用低利融資の原資となった。1947年ごろからは工業生産において、限られた資金・資材・労働力を鉄鋼や石炭などの基幹産業に重点的に投入する傾斜生産方式が導入された。これにより工業生産の基盤の復旧と整備がなされ、1950年に起こった朝鮮戦争による特需に乗り、経済